

表があった。一件の講演時間は20分で活発な質疑応答が行われた。セッションを4つに分け、第1セッションが心理関係、第2セッションが運動感覚関係、第3セッションがエージェント関係、そして第4セッションが入力インタフェースによる操作関係で、9件が大学で3件が企業の研究発表。参加者は、大学29人、企業13人、工技センター、テクノポリス関係4人であった。地域は福岡県が40名、大分県が2名、長崎県が1名、熊本県が1名、東京から2名の参加があった。当日、参加者には講演者の研究が分かるような資料をまとめて印刷し配布した。九州地区のVR研究も、心理から運動機能や福祉関連さらにエージェント、アニメーションや芸術方面へと広範囲に及ぶ活発な研究が開始されているように思う。今回の産官学を交えたVRの九州地区シンポジウムは今後のVRの進展により刺激になると共に、研究者の交流のよい機会となった。会場では、九工大の安部研究室によりVRの実演デモが行われた。また、講演終了後、東和大学のVR研究室を見学した。この後、自由参加で大学近くの店で懇親会を行った。

#### \*奈良先端大

### 佐藤宏介

(奈良先端科学技術大学院大学)

(News letter Vol.2, No.11)

平成9年度「人工現実感」拠点方式シンポジウムの第4回シンポジウムが、11月6日(木)13時から17時の間、奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科大講義室で開催されました。重点領域関係者が15名、企業研究者を中心とした一般来訪者が5名、奈良先端大関係者が12名、計32名の参加があり、2件の一般講演、4件のデモンストレーション講演、1件のビデオ講演、1件のデモンストレーションがありました。デモンストレーションは、情報科学研究科内の画像処理実験室、VR実験室を利用して行われ、SGI ONYX Reality Engineと94インチ3面ハイビジョンスクリーンを駆使して行われるなど、研究成果を体感できるよう工夫されていた。

特に、坂口嘉之(東洋紡)さん、角所考さん、美濃導彦(京大)さんらの「仮想服飾環境PARTY一仮想試着室の試作」のデモンストレーションは、会場設置のONYXと東洋紡けいはんな研究所設置のサーバとをインターネットを通じて連携させて行われ、好評であった。このシンポジウムにより、VRの研究成果の公開はドキュメントによる論述も重要であるが、適切なデモンストレーションによる体感、実感こそが本質であることが理解され

た。

#### \*岐阜大学

### 松波謙一

(岐阜大学医学部反射研究施設)

(News letter Vol.2, No.11)

第五回(岐阜大学)シンポジウムが以下のプログラムで平成9年11月7日(金)に開催され、成功裏に終了したので報告する。

1. 日時:平成9年11月7日(金)13:00~20:00
2. 場所:岐阜大学工学部第1会議室(講演)  
岐阜大学バーチャルシステム・ラボラトリー(見学)
3. プログラム:  
13:00~17:15

\*司会 松波謙一担代表者、岐阜大学医学部教授

#### \*講演

13:00~13:50 "脳の中の「現実感」"三上章充 京都大学霊長類研究所教授

13:50~14:40 "人工現実感から複合現実感へ"田村秀行(株)エムアール・システム研究所取締役研究開発ディレクタ

14:40~15:00 休憩

15:00~15:30 "On VSMM'97, VSMM'98, and VSMM Society"

スコットスレーン VSMM国際学会事務局長

15:30~16:00 "岐阜県におけるVR"小鹿丈夫 岐阜大学工学部教授

16:00~17:15 岐阜大学バーチャルシステム・ラボラトリー(VSL)見学

1. 挨拶:川崎晴久 岐阜大学VSL施設長(工学部教授)

2. 案内:川崎晴久VSL施設長松波謙一教授  
小鹿丈夫工学部教授、木島竜吾工学部助手

3. 懇親会:

18:15~20:00 「全国VR関連企業交流会」との懇親会、岐阜キャスルホテル

4. 主催:重点領域研究「人工現実感」総括班

後援:岐阜大学バーチャルシステムラボラトリー  
岐阜県VRテクノセンター

#### \*北海道大学

### 小林有希子・李乙松・井野秀一

(北海道大学電子科学研究所)

(News letter VOL.2, NO.11)

去る11月20日、北海道大学ファカルティハウス「エンレイソウ」にて、平成9年度文部省重点領域研究「人工現実感」の第7回(北海道大学)シンポジウムが開催された。本シンポジウムでは、まず「VRの人体および社会へ及ぼす影響の評価」と題し、4名の講演者が、コンピュータ外科・視覚生理学・社会心理学・アニメーション技術といった、おのおのの専門の立場からVRについて論じた。前半はVR技術の医療への応用やVR機器による視覚疲労の評価といった「人体への影響」について、後半ではVR技術を用いたゲームやアニメがもたらす「社会への影響」についての研究成果が発表された。終始、和やかな雰囲気の中で講演と活発な質問が繰り返され、どの講演も時間が超過気味であった。講演会の後、北大から徒歩15分の距離にあるMRシステム研究所札幌分室の見学会が行われた。ここでは、まず、MRシステム研究所(本社:横浜市)の研究概要と札幌分室の役割についての説明があり、次に、各種実験システム(ONYX 2と120インチ3面アーチスクリーンを利用した広視野映像呈示システム、各種のシースルー型HMD、フォースプレート搭載型モーションベース、他覚的視機能検査システム、非接触両眼球運動計測装置、マッピング機能付きデジタル脳波計)のデモがあり、これらのシステムを実際に体験した。本シンポジウムの参加者は総勢23名であった。多くは北大関係者(工学系・医療福祉系)であるが、道内企業や道外(秋田・東京)からの参加者もあり、講演や見学会では活発な意見交換が学際的雰囲気の中で行われていた。また、札幌の夜景を眺めながらの懇親会では、リラックスしたムードのなかで、大胆な人工現実感の将来像が語られていた。今後の本研究分野の更なる発展を見据える大変有意義な機会となった。

\* 東京工業大学

佐藤 誠

(東京工業大学)

(News letter Vol.2, No.12)

去る11月14日、東京工業大学ベンチャビジネスラボにて、平成9年度文部省重点領域研究「人工現実感」の第6回(東京工業大学)シンポジウムが開催された。本シンポジウムでは、まず3名の講演が行われた、講演題目は、

1. 東工大のVBLおよびCAVEについて(中嶋正之)
2. 視覚情報提示と実時間対話システム(久米祐一郎)

3. 等身大仮想環境の構築(佐藤誠)

であった。終始、和やかな雰囲気の中で講演と活発な質問が繰り返され、どの講演も時間が超過気味であった。

講演会の後、ベンチャビジネスラボおよび機械系研究室の見学会が行われた。

ここでは、CAVE、SPIDARによる等身大仮想環境、ファンタスティックファントムスリッパ、SPIDARによる仮想習字システム、バーチャルプロファイルシステム、パラレルマニピュレータのデモがあり、これらのシステムを実際に体験した。本シンポジウムの参加者は総勢40名であった。多くは東工大と東京工芸大の関係者であるが、企業からの参加者もあり、講演や見学会では活発な意見交換が学際的雰囲気の中で行われていた。

今後の本研究分野の更なる発展を見据える大変有意義な機会となった。

\* 東京大学

柳田康幸

(東京大学)

(News letter Vol.2, No.12)

12月5日に文部省科学研究費重点領域「人工現実感」公開シンポジウム第9回が東京大学インテリジェントモデリングラボラトリー(IML)にて開催された。

今回のシンポジウムでは講演会とデモンストレーションが行われ、予定した定員を上回る32名の参加者を数えた。

講演会では東京大学で活動する4名の研究者が講演を行い、講演者と聴衆の距離が近いアットホームな雰囲気の中、密度の濃いプレゼンテーションが行われた。

講演者と題目は以下のとおりである。

1. 臨場感の解明をめざして(舘 暉)
2. 光線情報記述に基づく空間共有コミュニケーションの研究(原島 博)
3. 両眼立体視メカニズムの時間特性(佐藤隆夫)
4. 全天周型映像装置(CABIN)の開発(廣瀬通孝)

当日の午前中にICATの見学会が行われており、デモの内容は重複する部分が多いが、全天周型映像装置(CABIN)を利用したデモンストレーションはやはり圧巻であり、まさに「百聞は一見にしかず、百見は一体験にしかず」である。

超広視野角を利用した映像提示は、当初から効果が予想されたウォークスルーの臨場感もさることながら、それ以上に、目の前に仮想物体を浮かべそれを上下左右から自分が体を動かして見て回るというアプリケーションを高